

## ワールドカップ 1988—国際会議の舞台裏—(7)

今野 浩 (中央大学)

## 13. 前夜

万博協会の400万が確実にあったところで、現場指揮官の心配は、おカネからシンポジウムそのものに移った。まずは参加者数、次いで接遇問題である。

ボストンでの理事会に提出した書類に記載したとおり、われわれは参加者800人をベースにすべてを組み立ててきたが、実はこの数字は十分な検討を経たものではなかったのである。

ボストンの(公称)1,000人を上限とし、ボンの600人を下限として、その中間の800人程度ではどうか。実際には800人は難しかろうが、目標としてはこのあたりが適当ではないか——。ところが5月初めに締め切った事前登録者は、予想を大きく下回っていた。

登録料は円建てで、5月1日までは2万6千円(170ドル)、それ以後は2万9千円と設定してあった。円建てにしたのは、変動する円レートに悩まされるのは賢明でない、と判断したためである。

シンポジウムの開催地は東京である。そこで発生する費用は円ベースである。円レートが高くなっても、支払いが減るわけではない。しかしこれは日本人の論理であって、ドルベースのアメリカ人理事に受け入れられるとは限らない。

ところが1987年初めに、理事会を代表して“査察”に訪れたバリンスキー会長が、あっさりOKを出してくれた。銀座の高級スキャキ店でたっぷり召し上がり、たっぷり聞き召されたころあいを見計らって切り出したのが、うまくいったのである(役員査察も悪いことばかりではない)。

事前登録料を安く設定すれば、お金に敏感な人達(特にアメリカ人)が早目に登録してくれるだろうと思ったのだが、2万6千円でも170ドルである。お金に細かいアメリカ人は、この程度の値引きでは腰を上げてくれなかった。

事前登録を締め切った段階の登録者数は、日本人が180人、アメリカ人が120人で、これに続くのがカナ

ダ人の29人、イタリア23人、中国21人、西独19人、オランダ16人、あとは1ケタが続き、トルコ、ベトナム、東ドイツ、アルジェリアの各1名まで、合計34カ国420人強である。

250人から300人は来るだろうと思っていたアメリカ人が、カナダを含めても150人というのは大誤算である。一方目立った研究者が少ないのに、23人が登録したイタリアと、厳しい経済状況の中国から21人というのは、予想の倍近い数字である。

MITの理事会で、私は「東京開催は数理計画法を欧米だけでなく、アジア諸国に普及させる効果がある」と力説したが、オーストラリア6、インド4、韓国、シンガポールの3を含めて、アジアから40人ものが来てくれるのは、その効果があったということである(実際このシンポジウムは、アジア諸国、特に中国で数理計画法が急発展するきっかけとなった)。

一方ブラジルから6人も来るのに、アルゼンチンがゼロなのは、ボストンでダミー扱いきられて、ヘソを曲げたためだろうか。

あとは当日登録者に期待するしかないが、ノーショウ20人を差引けば、もう300人来てくれないと700人に届かない(この時点で私は、800人という数字を完全に諦めた)。

参加者数以上に大事なものは、VIPの動向である。ダンツィク教授を筆頭とする第1世代、バラス教授らの第2世代、そしてトッド、グレッチェルら第3世代のエースを含めて、50人のAAA級研究者が来てくれば、参加者は満足してくれるだろう。

次の問題は接遇である。まずは晩餐会だが、実行委員を務めるS教授が、目白の椿山荘と掛け合って、1人1万円で高級料理を出してくれることになっていた

食べ物の質が良くても量が足りなくなると困る、と申し入れたところ、最後まで皿が空にならないよう努力すると約束してくれた。参加者数についても、シンポジウム初日に連絡すればそれでいいという。つまりリスクは、すべて椿山荘が引き受けてくれるというこ

とである。

そしてJTBのアレンジで、都内名所や鎌倉・箱根見物ツアーが6種類、実行委員夫人有志による生け花・折り紙教室、そして最後になって決まった相撲部屋見学など、これらのツアーの費用は個人負担なので、実行委員会として心配することはない。

記念品は、VIPには大会ロゴ・マークと東京の文字をデザインしたはっぴ、一般参加者には同じロゴ・マークがついた手提げバッグ、1つ900円をお願いしたいという零細業者の哀願に、財務担当のS氏は最後まで800円を譲らなかつたが、余りに気の毒なので私が割って入り、850円で決着した。

最後は金曜の夕方、学会の要人を招いて行われる会長招宴。このコストは実行委員会の負担である。外国人を喜ばせる格調高い和風レストランとなると、1人2万円を覚悟しなくてはならない。

当初30人で60万円という予算を組んだが、実行委員長夫人の提案で、後楽園の涵徳亭なるレストランを使用することが決まった。都営の施設なので、1人1万円以下でそれなりの料理が出るという。ただしここは人気スポットなので、予約開始日（当日の6カ月前）の朝6時に並んで予約を取った。

接遇の最後はVIPのケアである。この年満74歳を迎える「数理計画法の父」と令夫人（この人も70を超えている）の担当は、もちろん私である。

宿はお茶の水近辺の静かなホテルを確保したが、大豆アレルギーのこの人は、醤油も豆腐もバツである。また肉は脂肪の少ないヒレ以外は絶対にノーである。このあたりの担当者に細かく説明しておいたが、果たして希望通りにやってくれるだろうか。

これ以外のVIPの接待は、それぞれ個人的に付き合いのある実行委員・プログラム委員に依頼した。

シンポジウム前日の8月28日（日曜）夕方、私は会場となる中央大学後楽園キャンパスを訪れた。JR水道橋駅から、新しくできたばかりの東京ドーム脇を通過して、地下鉄後楽園まで約10分。ここから礪川公園を通り抜け、富坂を登った所に中央大学理工学部のゲートがある。

ゲートにはシンポジウムの看板と垂れ幕、そして門を入った突き当りの5号館のラウンジに、事前登録カウンターが設置されている。

カウンターのA氏に聞くと、すでに100人余りが登録したという。5号館のエレベーターで3階に上がると、エレベーター・ホールに2つの机が出ている。

そのすぐ奥が休憩所と実行委員控室、研究発表会場となるのは5号館の12教室と6号館の4教室である。

MITのときと違って、教室間の移動には3分もかからない。

#### 14. カーマーカーとディキン

シンポジウム初日の8月29日の朝、8時少し前に中央大学後楽園キャンパスに到着したときには、アルバイト学生はすでに仕事に取り掛かっていた。工学部の学生は本当に頼りになる嬉しい人達である。

アメリカの東海岸では、8月の最終週から新学期が始まるから、もう1週間開催時期を繰り上げた方がいいのではないかという意見もあったが、そうしなかつたのは、1週間の違いが航空運賃に大きな差を生むからである。

10時からの開会式のあと、1時から研究発表が始まる。9時を過ぎると参加者が集まってくるはずだが、VIPや招待客への対応は伊理・刀根両教授と接遇担当に任せて、私は実行委員控室で現場の陣頭指揮に当たった。

受付カウンターには、十分な数のスタッフを配備してあるので、大きなトラブルは起きないはずだが、特別な問題が発生したときには、私に対応することになっていた。

いきなりアルバイト学生に連れられてやってきたのが、中年のインド人である。用件はズバリ、登録料（参加費）の免除である。ダメだと答えると、半額に負けろという。再びノーと答えると、子供が多いので大変だとか、日本は金持ちじゃないかなど、粘りに粘る。

最後まで突っぱねたのは、もう1人のインド人がこの様子を見ていたからだ。1人に便宜を図れば、2人目も同じことを言う可能性がある。

次はお金を払いこんであるのに、未入金扱いされた主張するオランダ人。振り込んだ証明になるものはないというので（あればここに回ってこない）、とりあえず払ってもらい、金曜日までに振り込みがあれば払い戻すということで決着。その次はまた登録料免除を求めるトルコ人、エトセトラで、あっという間に午前は過ぎた。

午後の研究発表が始まったところで、私は控室で仲間たちと仕出し弁当を食べながら、登録者リストをチェックしていた。ここに姿を現したのが問題の人物、AT&Tベル研究所のナレンドラ・カーマーカー博

士である。

1986年はじめにこの人が小島政和教授の招きで東工大を訪れたときに、1時間ほど言葉を交わしたことがあった。数々の不行跡を働いたことで悪名高いカーマーカーは、「案外まともじゃないか」と刀根教授が漏らしたとおり、このときは“標準的な”インド人だった。

アメリカで爪弾きになっている男を厚遇する小島教授に心を許したせいも、29歳の天才は39歳の小島教授の質問に、丁寧に答えを返していた（小島氏が本格的にカーマーカー法の研究に乗り出すきっかけとなったのは、多分このときのセミナーである）。

しかし今日の前に立っているカーマーカーは、ボストンで見たカーマーカーだった。

「この論文を150部コピーして、会場で配布してもらいたい」

それは30ページもある、カーマーカー自身の論文だった。30ページを150部コピーすると、1枚10円としても4万5千円のコストがかかる。その上、これだけコピーしてバインドするには、たっぷり2時間かかる。ただでさえ忙しいのに、そんなサービスをしている余裕はない。そこで私は、「実行委員会としてはご希望に添いかねます」と答えた。

するとカーマーカーは、「私の論文は多くの人を読みたいはずだから、ぜひ配ってくれ」と言う。まるで部下に命令するような口調である。不快感を覚えた私は言った。

「あなたの論文をコピーして配布したとなれば、他の人の論文も同じ扱いをしなくてはなりません。われわれには、そのようなサービスをするお金もマンパワーもありません」

「私の論文を特別扱いはできないということか」

「その通りです。これはあなた自身、もしくはAT&Tの費用でやって下さい。門を出て左の方に行くと、コピーマシンを置いてある店がありますので、そこでやって下さい」

「そうか。分かった」

これまたアメリカ（在住インド）人の、ダメ元要求だったというわけだ。若い実行委員やアルバイト学生は、「ノーと言える日本人」を驚きの目で見ていた。

3年前のボストンでは、カーマーカーは時の人だった。900人の参加者の中の600人が、この人の特別講演に詰めかけたことが、それを証明していた。しかしデータを公開しないカーマーカーには、このとき“根

拠なく大言壮語する掟破り”という烙印が押された。

ところが翌86年になって状況が変わった。カーマーカーがダンツィク教授の弟子である、カリフォルニア大学のイラン・アドラーらと協力して数値実験を行い、ダンツィク・チームが10年がかりで組み立てた、単体法ソフトウェア「MINOS」を打ち負かす結果を公開したのである。

あの程度の工夫でうまくいくなら、さらに工夫を施せば50倍、100倍速くなる可能性がある——。ここに到って、世界中の優秀な研究者が大挙してこの分野に参入し、数値計画法の歴史始まって以来の研究大競争の幕が開いた。

数値計画法の研究は、数学力とプログラミング能力の競争である。数学の研究にはお金がかからない。またパソコンも急激に速く安くなったので、数値実験の環境も一時代前とは様変わりである。100人以上のエース研究者が束になって研究を進める中で、次々と新しいアイデアが生まれ、カーマーカー法を一般化した「内点法」の研究は、数値計画法の中心課題となった。

数値計画法にブレークスルーを起こしたカーマーカー……たとえカーマーカー法がディキン法と同じだったとしても、革命を起こしたことは事実だ……を表彰するため、表彰委員会が学会最高の賞である「ダンツィク賞」を贈ろうとしたところ、ダンツィク教授はこれを拒否した。

このため学会指導部は、急きょ「ファルカーソン賞」を贈ることにしたのだが、10年前に世を去ったファルカーソン教授は、自分の研究と関係が薄いカーマーカーの受賞に驚いたことだろう。

一流の研究者は、互いに情報をやり取りしながら研究を進める。あの方法がうまくいくなら、この方法がもっといいかもしれない。いやそれよりこちらの方がさらにいい——。

世界中の優秀な人たちが、束になって競争を繰り広げる中、一流研究者集団から疎外されたカーマーカーは、雲霞のごとき秀才群に蹴散らされてしまった（なおこのレースに勝利をおさめたのは、一足先に研究を始めていた小島政和教授のグループである）。

マラソンと同じで、トップ集団からある程度以上離されると、遅れを取り戻すことは難しくなる。栄光の「ファルカーソン賞」を受賞したものの、このときすでにカーマーカーは、“半過去”の人になっていた。実際カーマーカーの研究発表に対して、会場からは

「まだこんなことをやっていたのか」という声が聞こえたくらいである。

研究者としては半過去でも、ジャーナリズムでは時の人だった。その理由は、88年4月にアメリカで成立した、カーマーカー=AT&Tのアフィン変換法特許である。

そもそも、数学に特許を申請するだけでも許し難いのに、ディキンの登場によって新規性がないことが明らかになった後も、特許を取り下げないのは破廉恥だと研究者たちは考えた。

数学に特許が認められれば、自分たちも金持ちになれると歓迎するノーテンキな数学者や、これで紛争が増えれば収入増につながる、と舌舐めずりする特許弁護士はともかく、数理計画法研究者の90%以上が、この特許に反対していた。

数理計画法のみならず、計算機科学の世界や法律の世界でも、カーマーカーの数学特許について大論争が巻き起こっていた。このため、数学特許の発明者として高名な（悪名高い）カーマーカーを目指して、大新聞社が取材を申し込んできた。

数学特許で大魔王となったカーマーカーの、「半過去」論文に特別な便宜を図ったら、実行委員会の見識を問われていただろう。

半過去の人に替わってスターになったのが、バイカル湖からやってきたディキン博士である。

知り合いの外務省高官に頼んで、審査を早めてもらったが、入国審査が終わったのは、シンポジウムが始まる2週間前だった。この書類をイルクーツクに送ったあと、来てくれることが分かったのは、シンポジウムが始まる直前である。

ところが、イルクーツクから日本への直行便がないので、いったんモスクワに飛び、そこから成田にやってくるという強行軍のためか、真っ赤な目玉で姿を見せ、私を驚かせた。

ディキン博士は、1975年に線形計画法における業績でノーベル経済学賞をもらった大御所、レオニード・カントロピッチ博士の直弟子でありながら、ずっとシベリア暮らしを続けていたせいも、ロシア語以外は全く通じない。また背広といい靴といい、モスクワにあるソ連科学アカデミーに所属するエリート科学者とは全く違う、うら淋しい雰囲気醸し出していた。

急きょ設定された特別講演会では、“もしかしたら英語ではないか”と思われる奇っ怪な言葉を話した。バイカル湖から来た目玉の赤い怪人！ しかし講演内

容は分からなくても、傲慢カーマーカーをギャフンと言わせたディキン博士の、西側世界へのデビューをアレンジした実行委員会は、カーマーカーに批判的な研究者から、よくやったと喝采を浴びた。

現場責任者である私は、自分自身の研究発表はやったものの、他人の発表を聞く時間はほとんどなかった。全体で600件に及ぶ発表の中で聞きに行ったのは、ディキン、カーマーカーを含めて1ダースほどに過ぎなかった。

ある高名な研究者が、「国際研究集会の現場指揮官役は、一度はやらなくてはならないが、2度やるべきではない」と言っていたが、まさにその通りである。

1回はやらなくてはいけないというのは、誰かがこの仕事を引き受けなくてはならないということもあるが、やってみなければ、主催者側の苦勞は絶対に分からないからである。

ボストン大会のとき、理事諸氏は実行委員長の不手際を厳しく糾弾した。私が用意周到に事を運んだのは、彼らにあのような言葉を浴びせられたくなかったからである。

確かにMITグループの運営は、褒められたものではなかった。しかし理事諸氏は、あれほど厳しくシャピロ教授を糾弾する必要があったのだろうか。

私が知る限り、シャピロ教授はとても優秀で、人柄も良かった。この人が1979年に出した教科書『Mathematical Programming: Structure and Algorithms』は、類書の中で1,2を争う出来だった。このような優れた研究者が、結果的にこの分野から退出させられることになったのは、数理計画法コミュニティにとって、大きな損失ではなかったか。

シャピロ教授が弁明せず姿をくらましたのは、大失態である。しかしこの人にも、いろいろな事情があったのだろう。

またカーマーカー事件を阻止できなかったとしても、その責任はシャピロ教授ではなく、カーマーカーの異常なキャラクターと、AT&Tの特許戦略に帰すべきものだ。理事たちも、大きな国際会議の実行委員長役を務めた経験があれば、あれほど厳しく追いつめることはなかっただろう。

2回やるべきでないというのは、現場指揮官をやっても、研究上のプラスはほとんどないからである。600件を上回る研究発表中、わずか10件しか聞くことができなかったという事実が、このことを証明している。